

へられ、身はつる程の大事にも及ぶなり、悉みの中の劔は、さらでだにも恐るべき物ぞかし、心得ぬ事をあしきまに難じつれば、還て身のふかくあらはる、物也、大かた口かるきものに成ぬれば、某に其事きかせ、彼者にな見せそなど云て、人にこゝろをかれ、隔らる、口おしかるべし、また人のつゝ、む事の、をのづからもれ聞えたるに付ても、かれはなしなど疑れんは、面目なかるべし、然ればかたぐいの上をつゝ、しむべし、多言可止也、

〔徒然草下〕萬のとがあらじと思はゞ、何事にもまことありて、人をわかすうやくしく、詞すくなからんにはしかじ、

〔早雲寺殿廿一箇條〕一歌道なき人は、無手に賤き事なり、學ぶべし、常の出言に慎み有べし、一言にても人の胸中しらる、者也、

〔信玄家法下〕一不可佗言雜談事、○中略

一雖爲深知音、於人前不可妄雜談事、○中略

一對貴人縱使雖有千萬之道理、理り強不可申事、○中略

一於人前風物并賣買之雜談不可爲事、○中略

一縱附爲眞個之交、姪亂雜談不可爲、若人之申懸者、不立目様可立其座事、○中略

一於人前妄不可爲背語事、○下略

〔山鹿語類二十一〕慎言語

言語の品、其所、其時、其交接の人物に従て、甚其禮多し、朝廷之言あり、平居之言あり、喪祭之言あり、寇昏の言あり、賓客之言あり、軍旅の言あり、君臣、父子、兄弟、朋友、夫婦の言あり、平生の言あり、變に處するの言あり、此品々を詳に不究明ときは、言皆違を以て禮こゝにみだる、威儀大にそむくべし、○下略